

2021年5月16日 礼拝説教要旨

詩編講解説教61「天への凱旋」

詩編61：2～9、ヘブライ6：19～20

詩編第61編は分類上「嘆きの詩編」と言われます。これをダビデの歌とするならば、ダビデの深い嘆きが表されていると理解することができます。ダビデにはサウルとの対立がありました。そこには当然ダビデの嘆きと苦しみがあります。ただこれをダビデに限定する必要はありません。わたしたちも人生の中で様々な嘆きを経験するでしょう。それはすぐに忘れることができるものもあれば、簡単に忘れることができないものもあります。思い出しては涙しその嘆きを新たにするような、そういう深い嘆きというものがあります。自分では解決できず、もがき苦しむような嘆き。また苦しいと声を上げることができず人知れず嘆く悲しみがあります。詩編の嘆く嘆きというのはすべてそういう類のものであります。あるアメリカの聖書学者は「詩編は、人生において絶望の淵に立たされた人々が、言葉を尽くし、情熱を注ぎ込んで歌った歌と、祈った祈りを、幾世代にもわたって集めたものである」と述べています。詩編の嘆きはそのようなわたしたちの日常の具体的な嘆きと結びついています。さらに言えば、わたしたちの言葉にならない嘆きを代弁して嘆いていると申し上げてよいでしょう。

まさしく世界は嘆きで満ちております。イスラエルとパレスチナの対立が再び激化しています。ミャンマーの情勢も解決の糸口さえ見えず泥沼化している。そしてこのパンデミックの危機になお世界中が晒されています。ワクチンの接種も始まっておりますが、あまり楽観はできないと思います。これでウイルスを完全に克服できるとは思えません。個々の生活においても体を病むことがある。また死と向き合わなければならなくなる。これは御前に罪を犯して「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）と宣告された人間、楽園を追放された人類が負うべき当然の定めなのです。わたしたちの全ての嘆きの原因、根の部分には罪の問題があるということをおわたしたちはしっかり受け止めておく必要があります。

詩編はその嘆きの原因である罪、神さまとわたしたちとの隔たりを見つめています。「心が挫けるとき、地の果てからあなたを呼びます」（3節）ここに「地の果て」とあります。地の果てというと、遠い地平線の彼方というような水平のイメージがありますが、これはこの後の「高くそびえる岩山」から、むしろ「地下深く」と理解することもできます。実際そのように解釈する学者もいて、ある人は「陰府の淵」と訳しています。詩編第130編1節「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」（130：1）「ああ主よ、われ深き淵より汝を呼べり」を思い起こします。そういう陰府の深い底から高くそびえる岩山の上。そういう垂直のイメージの方がここを理解する上では重要だと思えます。そしてそれほどに神さまとわたしたちの隔たりは大きいのです。それゆえにわたしたちの叫びも祈りも神さまには届かないと思われるかもしれません。

けれどもだからこそ神さまは御子イエス・キリストを与えてくださいました。キリストがこの深い隔たりを埋めてくださいます。「神よ、わたしの叫びを聞き、わたしの祈りに耳を傾けてください」（2節）この切なる願いはキリストによって聞かれました。わたしたちの叫び、声にならない嘆きをも聞き取ってくださるために、神さまの御子イエス・キリストはこの地上にお生まれになりました。そしてわたしたちのあらゆる嘆きをご自身のものとしてくださいます。その極みが十字架の死です。主は十字架の上で叫ばれました。「わが神、わが神、なぜわたしを

お見捨てになったのですか」それは神さまから見捨てられるほどの絶望の淵であります。使徒信条では「陰府にくだり」と告白しますが、宗教改革者はあの十字架に「陰府」があると解釈します。神さまと断絶した世界。わたしたちの絶望の叫びを受け止めてくださるために、神さま自らが落ちるところまで落ちてくださったのです。

そしてそれで終わりではありません。神さまはわたしたちを連れ立ってこの叫びを御前に届けてくださる。それがよみがえりの御業です。厳密に言えば、キリストはよみがえりののち天に昇られました。使徒信条では「天に昇り神の右に座したまえり」と告白します。それが「高くそびえる岩山の上」です。この第6 1編3節が示す「地の果てから、高くそびえる岩山の上」この飛躍はイエス・キリストの十字架とよみがえり、そして昇天によって成し遂げられることとなります。そういう意味で、これまでも何度も申し上げますが、この詩編もキリストを待っている。キリストによって成就するのです。その典型的な御言葉と理解してよいでしょう。

先週の木曜日13日は教会の暦で言えば昇天日でした。以前、説教の中でわたしはもっとキリストの昇天を覚えるべきだということを申しました。それはこの天にこそわたしたちの最終目的地があるからです。この地上がわたしたちの終の住処ではない。わたしたちは地上においては旅人です。ここは仮住まいです。わたしたちの国籍は天、神さまのもとにある。詩人もこの天にまなざしを向けています。「あなたの幕屋にわたしはとこしえに宿り、あなたの翼を避けどころとして隠れます」(5節)

先週、合志豊岡伝道所の教会員福嶋孝子姉を御許に送りました。看護師として、また保育士として命と向き合い続けてこられたご生涯でした。またご自身の命とも向き合い続けてこられました。はじめはリウマチを病み何度手術をされたでしょうか。火葬され骨を拾う時に左右両手足、股関節の人工関節が幾つも残っていました。これが体の中にあっと思ったと言葉もありません。痛みを耐える日々でした。ご家族もその嘆き、涙の祈りをご存知でしょう。けれどもここに最後のことがあるのではない。姉妹はこの肉の束縛から解放されて、天の住まいに、神さまの御前に、帰るべき天の故郷に帰りました。それはまさしく凱旋です。火葬の前に龍一さんがリードして「ハレルヤ」を三唱しました。悲しみの中にも希望のある葬りでした。

その道をつけてくださったのがキリストです。地の果て、陰府の底から高くそびえる岩山の上に、死んでよみがえられ、天に昇られたキリストはわたしたちを連れ立って導いてくださいます。「神よ、あなたは必ずわたしの誓願を聞き取り、御名を畏れる人に継ぐべきものをお与えになります・・・わたしは永遠にあなたの御名をほめ歌い、日ごとに満願の献げ物をささげます」(6～9節) 神さまの御前にあって、永遠に神さまをほめたたえる、わたしたちにはそういう永遠の命が用意されているのです。わたしたちはその救いの約束として詩編第6 1編を読むことができます。